



特集

このまちで、私たちがどう生きるか

わたしたちのまち。
わたしたちのみどり市。
みんな、みどり市を良く
していこうじゃないか。
みどり市は良いまちだと、
誰もが思える日が来ること
を願って――

01 まちに対する誇りとは？

ここ数年の間に「シビックプライド」という言葉がよく使われるようになった。「都市に対する市民の誇り」という意味で使われることが多い言葉だ。昔からよく耳にする「郷土愛」よりも、当事者意識に根付いている点の特徴といわれている。人口減少や大都市への一極集中が社会問題となっている昨今みどり市をより良いまちにしていくために、シビックプライドの醸成はとても重要な課題だ。しかし「シビックプライド」という言葉とその意味を説明するだけでは、きっと共感してもらえない。そこで、実際に当事者意識を持って「まちを良くしていこう」と取り組んでいる人たち、すなわち市民活動をしている人たち取材し、紹介することにした。その活動や考えを通して、シビックプライドについて理解を深めていただくために。その取材の起点になっていただいたのが、複数の市民団体で長年活動している松崎靖さんだ。松崎さんたちの活動を知ること、まちに関わって生きることに考えてみたい。

松崎 靖さんってどんな人？

プロフィール profile

大間々町出身の71歳。
大間々町内で足利屋洋品店を営む傍ら、複数の市民団体で活動しています。現在は主に、代表を務める「三方良し」の会と郷土を美しくする会のほか、みどり市観光ガイドの会、ながめ黒子の会、富弘美術館を囲む会で精力的に活躍。また、松崎さんご自身で企画・編集する地域情報紙「虹の架け橋」も月1回発行。その発行回数は340回を突破しています。





「三方よし」の会
観光ガイドの会

その後、岡直三郎商店の中へ移動し、醤油蔵の見学が始まった。ここでは醤油の仕込みを行っている巨大な木桶の上から諸味（蒸した大豆と炒った小麦などを混ぜた醤油こうじに塩水を加えたもの）が発酵している様子を見ることができ、製造の工程などについて一通り解説があり、見学も終盤に差し掛かったところ、松崎さんが大間々町と同商店にまつわるエピソードを紹介してくれた。

明治28年に大間々町2丁目大火事が発生。その被害はとても大きく、家屋や土蔵、町役場などが消失してしまうほどだったそう。その火が4丁目まで迫ってきたとき岡直三郎商店に貯蔵してあった大量の醤油をかけて消火し、被害の拡大を食い止めることができた。

この話の後、松崎さんは次の言葉でガイドを締めくくった。「店の財産である『醤油』を投げ打って、町を救った。この逸

話にも『三方よし』の心意気を感じずにはいられません。私がこうした話をする中で、その心意気に共感してくれた人が、大間々町を再度訪れたり、住んでもらえたりしたら嬉しいな、と思って町中の案内をしています」

この日、松崎さんの話を聞いて、学生たちはどう感じたのだろうか。

「醤油をかけて大火事を食い止めた話に感動しました。そして、この話が現代まで受け継がれているということもすごいです」

江戸時代からこの地に脈々と受け継がれてきた「三方よし」の精神。数百年の時を経て失われることがなかったのは、いつの時代でも人々の心に響く価値があるからだろう。きっとこの先も「三方よし」を大切に思う人たちによって、その思いは受け継がれていく。

インタビュー interview

「三方よし」の会 副会長
新井 規夫さん

町のにぎわいを
創出したい

大間々町の三、四丁目は古くからの蔵などが多く残る地域です。そうした伝統的な建造物を魅力ある資源として磨き上げ、多くの観光客に訪れてもらい、町のにぎわいを創出したいという思いから活動を始めました。

それが高じて、私が所有する敷地内の蔵を改修し、宿泊施設やカフェもある多目的施設「蔵人 新宇」として生まれ変わらせました。改修工事費などの不安もありましたが、決断できたのは愛着や誇りがそれに勝ったためです。大間々の町歩きの名所となるよう、これからも「三方よし」の会と連携しながら町を盛り上げていきたいな、と考えています。



02 思いを受け継ぐ

松崎さんが代表を務める団体の一つ「三方よし」の会。これは江戸時代に大間々町へ移り住んだ近江商人の「売り手よし、買い手よし、世間よし」という「三方よし」の精神を基本として、地域の文化や歴史を継承するための活動に励んでいる団体である。これまで、江戸時代の常夜灯の移設や案内看板の設置、醤油の仕込み桶を再利用した木道の整備などを行ってきた。最近では、戦国時代末期に大間々町を開拓し、その礎を築いた「大間々六人衆」として知られる旧家、高草木家の土蔵の調査を実施している。

その日、松崎さんは観光ガイドとして、フィールドワークで大間々町を訪れていた学生たちに町中を案内していた。老舗の醤油蔵である岡直三郎商店の隣では「三方よし」の会が修復し

た「三方よし」の井戸について説明。

もともと、この井戸を設置したのは同商店であるが、あえて塀の外側に作ったのは、「周囲の人が自由に利用できるように」という心遣いからだったそう。その後、朽ちていた井戸を松崎さん達が「三方よし」の精神を象徴するものとして修復。手押しポンプを動かすと、今でも水を汲み上げることができる。

井戸の説明を受けた学生から、次のような感想を聞くことができた。

「レトロ感のあるものが好きなので、こういう井戸いいですね。あと、見るだけでなく、実際にポンプを動かせるのは珍しいと思います。塀の外側に作った理由が「周囲の人のため」ということにも心惹かれました」



郷土を
美しくする会



清掃活動は、参加者同士で世間話をしながら和やかに進む。その様子は、本当に趣味のサークル活動のようだ。自分が楽しみなが、他の誰かのためになっっている。それは、まさしく「三方良し」の精神そのものと言える。とはいえ、この活動を長年継続するのは、さぞ骨が折れるだろうと思いつつ「毎週、この活動が無償で続けているなんてすごいですね」と声をかけるとこんな言葉が返ってきた。「もう習慣になっっているから。もし、お金をもらったらこの活動は続けられないと思う。無償でやるからこそモチベーションになっっているんだよ」午前6時30分に1358回目の清掃は終了した。昔はごみや落書きで、汚いと散々な言われようだった大間々駅の公衆トイレだが、松崎さんたちが清掃を始めてからというもの、あまり汚されなくなっっていたそうだ。そのため、今回の清掃開始前もとても汚れているという印

象はなかったが、清掃後にはよりきれいなトイレへと生まれ変わっていた。

・この活動を続ける理由や原動力は何ですか、

以前、笠懸東小学校に教員として勤務していた富岡秀哉さんがこの質問に答えてくれた。「地域を良くしようとコツコツ取り組んでいる松崎さんへの憧れから続けています。それと、会に参加することで、他の人から面白い話を聞けるのも楽しみの一つです」

凡事徹底。「誰でもできること、誰にもできないぐらい、徹底してやる」という意味で、郷土を美しくする会のモットーだ。この言葉のとおり、毎週欠かさずトイレ清掃を行ってきた同会の皆さんは、これからもみどり市を美しくし続けるだろう。記念すべき1500回目のトイレ清掃はもうすぐだ。

03 凡事徹底

午前5時45分の大間々駅。活動は午前6時からということだったが、すでに松崎さんはその日のトイレ清掃の準備をしていた。一通り清掃用具を並べ終えると、壁や表示板を雑巾で拭き始める。この日の清掃は通算何回目なのか松崎さんに尋ねると「1358回目だね」との答え。郷土を美しくする会による大間々駅のトイレ清掃は毎週金曜日の朝、行われている。平成9年7月25日の第1回目から現在に至るまで、盆暮れ正月関係なく、雨の日も風の日も雪の日も、一度たりとも欠かしたことはないそう。そもそもきっかけは、第1回目の清掃前日に行われた、町づくり講演会の講師に「この町は良いところだが、駅の公衆トイレが汚い」と言われたことだった。その講演会の打ち上げで「あんなこと言われちゃったから、みんなでトイレ掃除やるか」とその場の一人が酔った勢いで発言して、翌日から活動が

始まった。取材当日の参加者は8人だ。松崎さんが広報紙取材のことを伝えると「朝早くからお仕事お疲れ様」と労いの言葉をかけられた。「皆さんもお早いですよね」とこちらが言うと、さらりと「私たちは趣味みたいなものだから」。トイレ清掃の大よその役割分担は決まっているらしく、集まった人は順次、自分の担当部分の清掃に取りかかっていく。その清掃の方法だが、基本的に「手」で行う。壁や床はもちろんのこと、便器の中でさえもタワシを持った手を突っ込んで磨き上げる。柄のついたトイレブラシは使わない。さらに、現在は感染症対策でゴム手袋を装着して清掃しているが、以前はこれを素手でやってた。この素手によるトイレ清掃は、自らの清掃によって企業改革を成し遂げた鍵山秀三郎氏が手本となっている。なぜ素手かという点、直に触れることで汚れの原因である問題を理解しやすくなる、という意味があるそう。

インタビュー interview

松崎さんとは幼なじみで、郷土を美しくする会として活動していることも知っていたので、平成13年の退職を契機に私も、地域とのつながりを求めて始めました。活動を継続している理由は、住んでいる所や社会経験、年齢も違う人たちといろいろな話をできるのが楽しみだからです。いざというときに人を集められる松崎さんが会の中心にいるのも活動が続いている要因かと思えます。決して昔からのメンバーだけではなく、若い人も入ってきて活動できていることから、後継者も育っていると感じます。

中澤 秀夫さん

住んでいる所、年齢が違う人たちと話をできるのが楽しみ





松崎さんと旧知の仲であり、同じく複数の市民団体で活動している松島茂さんを交えて、お二人から市民活動に関するエピソードや思いを伺った。

——二人の関係性

松崎 お互い昭和27年生まれで親同士が仲良かったんですよ。私の父が松島さんのお宅で衣料品の出張販売をしていたこともありました。

広間に服がたくさん並んでいたのを覚えています。それを目当てに早くから近所の人が集まってきました。一緒にクラスにはな

「みどり市の一体感づくりがしたい」(松島)

04 このまちで、私 たちはどう生きるか

松島 その頃の松崎さんは毎朝、一人で黙々と部活動の自主練をしていましたね。「真面目な男だな」とその頃から思っていました。

——市民活動のきっかけ

松島 みどり市観光ガイドの会の活動を始めたのは、みどり市の一体感づくりがしたいな、と思ったのがきっかけです。市外からお客さんに来てもらうのもそうですが、市民も自分が住んでいる場所以外の町を歩いて、その土地を見つめてもらいたいという思いがありました。

花桃の里づくり実行委員会の設立は、30年ほど前から地元の人たちが花桃を植えていて花の名所になっていたのに知名度が低かった小夜戸・大畑花桃街道を、情報発信の方法を工夫することでもっと知ってもらいたい、という気持ちからです。

松崎 動機やきっかけは、活動の内容によって違うかもしれないけれど、共通するのは「なんだか面白そう」とか「町に貢献できる」「やりがいがある」とかそういうことなのかもしれない

——これからの心配事

松崎 心配事としては、次の世代にバトンをどう渡すのか。やはり世代間の差は埋めがたいものがある。ただ、若い人には若い人なりの発想があるなど感じています。たとえば、ながめ公園の活用に関しても、夜市など新しいイベントを開催するに当たってSNSを駆使して情報発信していた。こういうのは我々がやりたくてもできない。「地域を何とかしよう」と考える人たちが出てきてくれれば形は変わっても継承されていくように思います。

松島 観光ガイドの会は割と新しい人が入ってきているけれどわたらせ渓谷鉄道各駅イルミネーション事業実行委員会は設立から20年経ってもメンバーが若返っていない。わたらせ渓谷鉄道の存続が危ぶまれた時のことを知っている人たちが継続しているような状況です。

我々もそんなに長くは活動できないだろうから、これからの人が、わたらせ渓谷鉄道に対してどう考えるかで関わり方も変わってくるんじゃないかな。

せん。

——活動による変化

松崎 郷土を美しくする会の活動で、大間々駅の落書きがなくなったと以前話しましたが、町中のごみも少なくなったと思います。

松島 観光ガイドで大間々町を案内したお客さんに「ごみが一つも落ちていない、きれいな町ですね」と、とても感心されたことがありました。

松崎 初めて訪れた人はそういう風を感じるみたいだね。やっぱり、そういう声を聞くのが一番嬉しいよね。

——思い出に残っている瞬間

松島 今年の春の花桃まつりにお客さんが多く来てくれて、駐車場の整理を一日中やっていた。本当に大変だったけど、充実した気持ちになりました。ただ、来年の土曜日と日曜日はきちんと交通整理をしてくれる人が欲しいですね。

松崎 大間々駅のトイレ掃除500回目の時「いつもきれいにありがとう 祝!! 500回

「この町が好きで、

その良さを知ってもらいたい」(松崎)

感謝」と書いてあって、折り紙のバラが張り付けてある色紙が洗面台に置いてありました。それまで私たちの活動が知られていると思っていなかったから、驚きとともに感激したのを覚えています。

千回目の時に、宮城県や静岡県、兵庫県からトイレ掃除の仲間が節目の掃除に駆けつけてく

れたことも良い思い出になっています。そうした人と人とのつながりが一番の成果のように思います。この活動をしていなかったら多分、出会うこともなかったでしょうから。



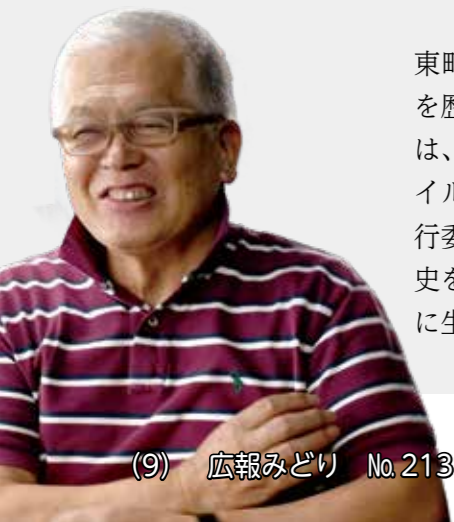
トイレ清掃500回目の色紙

プロフィール profile

東町出身の71歳。みどり市議会議員やわたらせ渓谷鉄道株式会社代表取締役社長などを歴任した後、市民活動に取り組み始めました。現在は、みどり市観光ガイドの会やわたらせ渓谷鉄道各駅イルミネーション事業実行委員会、花桃の里づくり実行委員会などの団体で代表を務めています。市内の歴史を熱心に研究し、得た知識を観光ガイドなどの活動に生かしています。



小夜戸・大畑花桃街道



松島茂さんってどんな人?



「このまちが好き」から
「このまちに関わる人が好き」へ

今回の取材では「活動を通して人と関わることの楽しさ」について多く聞かせていただいた。松崎さんの言葉にもあったように「まちのために何かしたい」という思いが活動のきっかけになり、やがて同じことを考える仲間ができ、そのつながりが重要なものになる……。

「このまちが好き」から「このまちに関わる人が好き」へ。その過程を経てシビックプライドはより強くなっていくのではないだろうか。シビックプライドは、まちを持続可能にする上で欠かすことのできない要素だ。一人でも多くの人がシビックプライドを持っていただけると、皆さんがまちに関わるための支援を継続していきたいと改めて思った。

みどり市は良いまちだと、誰もが思える日が来ることを願っています。



団体によっては20年以上の長きにわたって活動している松崎さんと松島さん。長期に及ぶ活動を支えたものは、何だったのだろうか。

——長年活動できた理由

松島 長年やってきて思うのは行政との関わり方が大事ということ。団体の自主性を尊重してくれる、事務作業をフォローしてくれる。私に関わっている団体はそうした関係性で上手くいっているように思います。きちんとした組織で、きちんとした運営ができていっているのは、行政の力があるからなんですよね。
松崎 やっぱ町が好きだからですかね。この町の良さを知らしてもらいたい、ということが原動力になっています。観光ガイドをして「また来たい」と言ってもらえると、活動してよかったなと思います。私も若い頃は「町が好き」という意識は特別ななかったけれど、星野富弘さんの詩にもあるように、自分が生まれ育った故郷への思いに

いつの日か気付くんですよ。この町の風景や文化、人々が自分を形作ってくれたわけですから。

——「松崎さんに憧れて活動している」という声について

松崎 あはは、そうですか。トイレ掃除は凡事徹底の精神で続けてきました。それ以外のことはあまり凡事徹底できていないですけど、そんな風になってもらえたということは、何か一つこれだけは続けてみよう、という姿勢に共感してもらえたかなのかもしれない。

松島 高校生の時の自主練のエピソードからも分かるように、本当に松崎さんは昔からコツコツ続けるということが得意だったからね。

みどり市に関わってみませんか？

—市民活動に興味がある人へ—

市では、市民が自主的に行う「市民活動」を支援しています。

■市民活動とは？

主に市民が主体となり、地域の利益を目的とした社会貢献活動を指します。

ボランティア活動、NPO活動、行政区の活

動などが該当します。

※特定の者の営利や宗教、政治、選挙活動を目的とする活動は除く。

■市民活動団体を紹介

右の2次元コードからご覧ください。



■興味がある人はお問い合わせください

問い合わせ先 地域創生課 ☎(46)9067